

中華文明上に組み込まれる西洋医学

松本秀士

提 要

所謂“中西医汇通派”是中国传统医学上的一个学派。但他们没有进行过实际上的中西医汇通，而只不过是参考西医和中医历代各家学说来考证《内经》的各条经文而已。所以我们认为把本稿所提出的一系列汇通医家改称为“中西医汇参派”较合适。中西医汇参派的主要特点是有合信所著的《全体新论》等西医书的参考和其中的人体解剖图的引用。当时的西医解剖学已经论到人身全体，而中西医汇参派所关注的只是内脏等为主的部分内容。他们所考证的《内经》也只是部分内容。总之，他们对中国传统医学上所起的作用只是用西医解剖图来刷新传统的脏腑图，把西医解剖图排列在《内经》部分经文的系统上。

0. はじめに

中国伝統医学上で一般に「中西医匯通派」と称される医家達がある¹。イギリスの宣教師で医師のホブソン(Benjamin Hobson; 漢名は合信)が著した中文による一連の西洋医学書刊行の前後を中心とする年代にその出現をみる。そして中西両医学の匯通、つまり中国伝統医学と近代西洋医学の両医学理論の融通を行った等で評価される。そしてまた今日中国で展開される中西医結合と呼ばれる医療の先駆けとしても評価されている。中西医匯通派には、主にホブソンの『全体新論』等を参照して著された諸医書がみられる。それらで展開された論述には、東西文明接触の本質を知る良い手掛かりが含まれる。それは、辛亥革命直前に本格的に流入してくる日本経由の西洋医学が係わらないものとして、また、続く民国期に渡って行われる西洋医学を制度化させようとする政治的意図のほぼ絡まないものとしても重要である。本稿では、そうした中西医匯通派による諸医書での西洋医学理論の扱いを明らかにしたい。

1-1. 西洋医学の本格的流入に先がけて

中西医匯通派の諸医書のほとんどは、『全体新論』等の中文西洋医学書を参照しているが、中でもそこにある人体解剖図に着目している。そしてまたこれらの諸医書のほとんどが、道光 10

年(1830)に刊行された王清任による『医林改錯』²に掲載される親見臟腑図を参照している。この親見臟腑図とは、王清任自らが人の遺体により臟腑の形態を確かめ、それを描いたものである(図1-b参照。図は順に、「胃」(右上)、「脾」(右下)、「氣府-小腸」(左上)、「瓏管-出水道」(左下)を表す)。『医林改錯』以前にみられる従来の臟腑図では、その由来が明らかでないものが多く、清任はそうしたものを明確にする意図をもってこの親見による臟腑観察を敢行したものである。そしてこの親見臟腑図は、そうした従来の臟腑図よりも詳しい描写となっている。

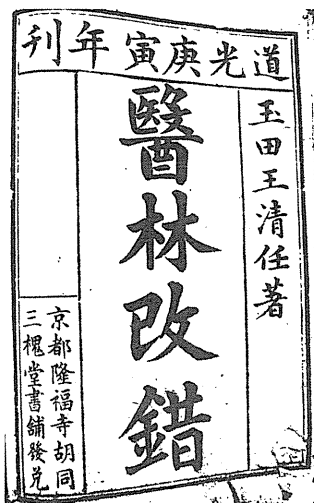


図1-a;『医林改錯』扉

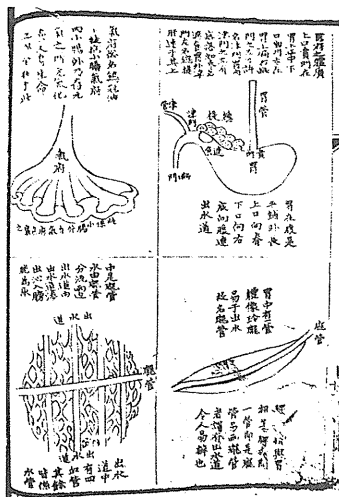


図1-b;『医林改錯』王清任親見臟腑図

日本では『医林改錯』以前に、山脇東洋が既にそうした従来の臟腑図に対する疑問から自らの目で刑屍観臓を行い、その時の観臓図を『蔵志』の中に示している。そしてその精神は杉田玄白らによる『解体新書』に受け継がれている³。しかし『医林改錯』にはそうした日本からの影響は全く認められず、即ち『医林改錯』は中華文明の中で、ほぼ自力で近代解剖学の入り口にまで到達したという意義がある。清任の示した親見臟腑図に近代的な解剖学の価値を求めるには無理があるが、少なくとも後の本格的な西洋医学(以下本稿では西医と呼ぶ)の流入に際して出現をみる中西医匯通派にとっては、異文明医学の理解のための重要な足がかりとなっている。

1-2. 中国伝統医学上で初めて登用される西医解剖図

ホブソンによる『全体新論』が、中国に初めて本格的な西医を伝えた中文による書であることは周知の通りである。しかしホブソンが中国大陆に入る以前には、既にその他の宣教師達等によって西医による医療活動は行われている。そしていち早くそうした西医との接点をもった中国伝統医学上の医家が陳定泰である。定泰は、清任による親見臟腑図の存在を知ったことを

きっかけに、自らも臓腑の眞の姿を求め、当時広東の地で開業する西洋人医師を訪ねている。そしてそこで差し出された欧文による解剖学ないしは西医等の書にある解剖図を模写し、この『医談伝真』⁴の中で示している。そこに描かれた西医解剖図は内臓を示すものを中心に 16 を数える。この『医談伝真』は道光 24 年(1844)までにまとめられた定泰の遺稿をもとに、その孫らの手によって光緒元年(1875)に刊行されたものであるが、幸い定泰自筆の部分は厳密に区別されている。よって『医談伝真』は、ホブソンによる『全体新論』刊行以前に中国大陸にもたらされた(欧文による)西医書等にある人体解剖図の様子を知る手掛かりとして重要である。



図 2-a ; 『医談伝真』扉



図 2-b ; 『医談伝真』「西洋營經血脉全圖」

『医談伝真』に示される 16 の西医解剖図の内、「西洋營經血脉全圖」(図 2-b 参照)は、ホブソンの『全体新論』にある「週身血管管図」(1-3 節の図 3-b 参照)に非常に近い形態である。しかし『医談伝真』が中国に広く出回った形跡はなく、現存のものも僅かに中国中医研究院図書館所蔵の初刻本のみである。また定泰に続く中西医匯通派の出現は、ホブソンによる中文西医書刊行後も暫く待たなければならない。それにも係わらず『医談伝真』では既に、西洋の解剖図のみならず、清任による親見臓腑図やその説も引用するという後の中西医匯通派にほぼ共通する特徴をもち、そうした意味において定泰は紛れもなく中西医匯通派の一員である。

1-3. 『全体新論』⁵に示される解剖図の概要

この書はホブソンによる著作で、咸豊元年(1851)に刊行されている。先述のように、本書は中国に初めて本格的な近代西洋医学をもたらした中文による西医書で、後の中西医匯参派にとっても重要なものとなっている。『全体新論』にある計 22 葉に及ぶ解剖図等は、ほぼ本文の各篇

に対応させた挿入である。そこに示される図は、人体解剖図が主であるが、他に病態を扱った内容の図や、ヒト以外の動物に関する解剖図・非解剖図、更には物理学的内容を扱った模式図も含まれる。これら全てを含めた図の総数は 213 である。病態図は 8 を数え、その内訳は、2 つのヘルニアに関する病理解剖図と、8 つの非解剖の眼部病態図である。ヒト以外の動物に関する図は 41、物理学的模式図は 2 を数え、これらは一般にいう人体解剖図ではない。そうしたものを排除すれば『全体新論』にある人体解剖図は 160 を数えるのみとなる。

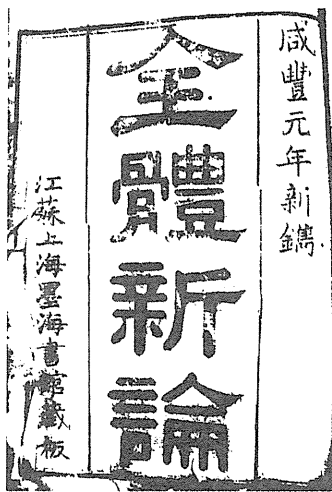


図 3-a ; 『全体新論』扉



図 3-b ; 『全体新論』

「週身血脈管図」

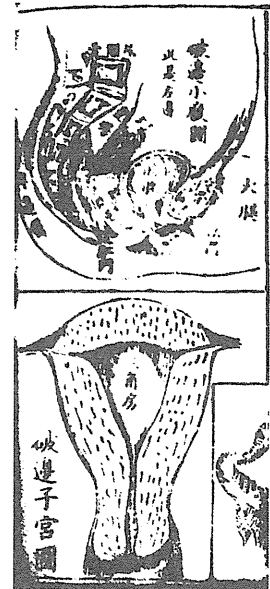


図 3-c ; 『全体新論』

「破邊小腹図」 / 「破片子宮図」(上/下)

『全体新論』が、当時の西医の基礎全般について、人体解剖学の体系上でまとめたものであることは一目瞭然のことである。そうした中でも、特に胚胎・胎児・分娩といった産婦人科の内容を示していることは一つの特徴で、これらに関する図は 12 を数える。なお、ホブソンの後の著作である『婦嬰新説』⁶で示される人体解剖図は 40 を数え、女性生殖器に関する解剖図の他、そうした産婦人科の内容に分類される解剖図が示されている。『全体新論』にある女性生殖器や産婦人科の内容を示す解剖図の中には、『婦嬰新説』のものと同様のもの、ないしは同様の主旨のものが 7 つみられる。例えば図 4-b に示した『婦嬰新説』の「子宮部位図」(右半身のものを示している)と「子宮図」(“三角房之路”示す×印有)は、それぞれ『全体新論』にある「破邊小腹図」(左半身のものを示している)「破邊子宮図」(“三角房之路”示す×印無)に類似する(図 3-c 参照)。なお『婦嬰新説』には、1 つだけヒト以外の動物に関する解剖図があり、これを含め

た総図数は41である。本稿で取り上げた中西医匯参派の諸医書では、こうした『全体新論』や『婦嬰新説』にある図の内、人体解剖図に分類されるもののみを引用しており、それは産婦人科の内容も含むものである。

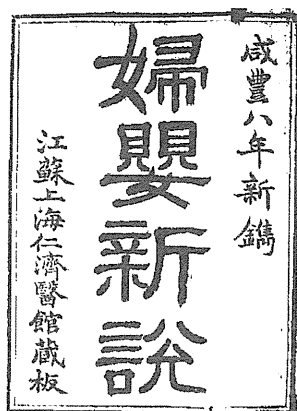


図4-a; 『婦嬰新説』扉

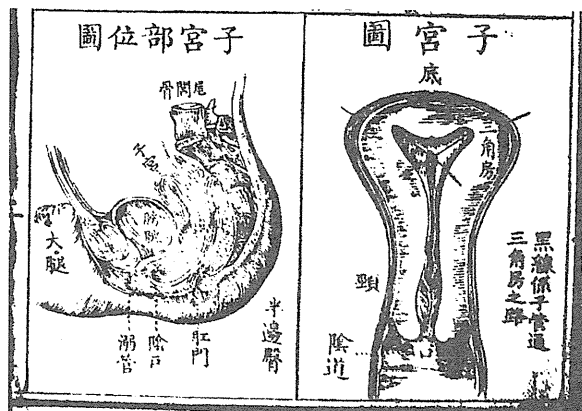


図4-b; 『婦嬰新説』「子宮部位図」/「子宮図」(左/右)

2-1. 中西医匯通派による諸医書

本稿では中西医匯参派の諸医書の中でも特に初刊が清末にあり、西医解剖図の引用のあるものに限定して取り上げ、対象となる中西医匯通派の諸医書を以下の表「中西医匯通派による諸医書とその特徴」で示した。諸医書の中には、①『内経』の経文の引用、②伝統の経絡理論についての態度、③『医林改錯』以前までに一般的であった従来の臟腑図(表中では“旧臟腑図”とした)の引用、④王清任による親見臟腑図やその説の引用、⑤西医解剖図の引用、の以上の5項目の核心的事項がみられ、これを併せて表の中に示した。また中西医匯通派と密接な関係をもつ『医林改錯』『全体新論』並び『婦嬰新説』についてもこの表で取り上げた。なお成書年は一部括弧内のものをその医書の序列に採用しており、それらの詳細については各節を参照されたい。

『医林改錯』『医談伝真』では『内経』の経文の引用はみられるものの、ほぼ全面的に否定の立場にある。『全体新論』以下の書については『婦嬰新説』を除いて、全てに『内経』の経文からの引用がみられる。『全体新論』にみえるホブソンの『内経』に対する態度については、必ずしも肯定的とはいえない面もあるが、おおよそポジティブであり、少なくとも全否定ではない。『医林改錯』『医談伝真』では伝統の経絡理論についても否定の立場にある。『全体新論』では“経絡”についての語はみられるものの、これについて肯定否定の判断を濁しているため⁷、表中では「？」と示した。但し、中国伝統の脈診による診断法については、完全否定している⁸。

『全体新論』初刊後の中西医匯通派の諸医書では、従来の臟腑図(表中“旧臟腑図”)の引用は皆無となり、代わって『全体新論』等の西医解剖図が提示されていることは、一つの特徴であ

る。表中“清任引用”の項目は、『医林改錯』の本文および「王清任親見臟腑図」の引用の有無を表し、本文のみの引用の場合は○印を示し、図の引用もある場合は、その図数を示した。清任による親見臟腑図そのものの引用がないものであっても、清任の示した図の内容が主な論点となっており、これらの中西医匯通派にとって『医林改錯』が重要な位置にあることがわかる。

“西医解剖図”の項目では、各医書に掲載される西医解剖図の図数を示した。明らかに『全体新論』からの引用であることが判るものには、図数の前に「q」を、同様に『婦嬰新説』からのものと判るものには「f」の記号を付して、それぞれの引用図数を示した。なお表中の書名で「匯通医経」は『中西匯通医経精義』、「華洋臟象」は『華洋臟象約纂』、「匯参銅人」は『中西匯参銅人図説』、「匯参医学」は『簡明中西匯参医学図説』がそれぞれの正式名称である。

書名\項目	著者	初刊	内経	経絡	旧臟腑図	清任引用	西医解剖図
医林改錯	王清任	1830	○(否)	否	○	—	—
医談伝真	陳定泰	1875(1844)	○(否)	否	○	11	16
全体新論	ホブソン	1850	○	?	—	—	160
婦嬰新説	ホブソン	1858	—	—	—	—	40
中西医粹	羅定昌	1892(1887)	○	○	—	10	q13, f3
匯通医経	唐宗海	1892(1894)	○	○	—	1	30
華洋臟象	朱沛文	1893	○	○	—	○	q121, f8, 他2
匯参銅人	劉鐘衡	1899	○	○	—	○	36
匯参医学	王有忠	1906	○	○	—	—	46

表 中西医匯通派による諸医書とその特徴

(※王清任とホブソンは参考として記したもので、いわゆる中西医匯通派には数えない)

中西医匯通派のほとんどが『医林改錯』を引き、西医参照での足がかりとしていることは先述の通りである。しかし清任の『医林改錯』での意図が、『内経』等の經典の示す臟腑や経絡等の理論に疑問符を打ったものであるのに反し、定昌による『中西医粹』以下の中西医匯通派は最終的に『内経』の経文を立証するために、清任の説や西医の内容を引いている。つまり西医解剖図は、あくまで旧臟腑図に代わるものとしての位置づけにしか過ぎないのである。『華洋臟象約纂』は例外的として、引用の西医解剖図が50を数えないということは、一つの特徴である。これは主に『全体新論』等の西医書に示される内臓といった一部の内容にのみ、中西医匯通派の興味が集めたことを反映するものである。それまでの中国伝統医学上では、臟腑の各図の12に加え、若干の臟腑全図・骨図等でその理論を支えてきたことをみれば、『全体新論』の160にも及ぶ人体解剖図は、余りにも膨大な情報量であったことが伺える。

2-2. 中国伝統医学上で初登用のホブソン西医書の人体解剖図

『中西医粹』⁹⁾は四川の羅定昌による著作で、その成書に些か複雑な経緯をもつ。定昌はその成書に先立つ光緒8年(1882)に『臟腑図説』を刊行している。後の光緒13年(1887)には、これに「附録中西医士臟腑図説」を加筆し、更に『症治要言』を加えて『臟腑図説症治合璧』として刊行している。更に後の光緒19年(1893)には、『医案類録』を末巻として加え、その翌年(1894)には『中西医粹』と改名し、これを刊行している¹⁰⁾。



図 5-a; 『中西医粹』扉

(『臟腑図説症治合璧』扉が併記される)

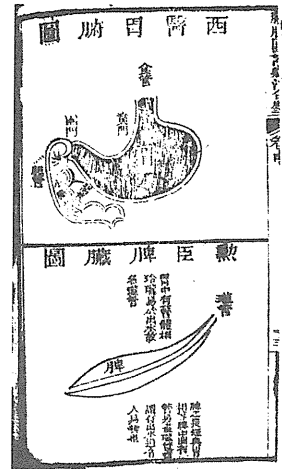


図 5-b; 『中西医粹』

「西医胃腑図」(上) / 「敷臣脾臟図」(下)

西医についての主な内容は光緒13年(1887)までに著された「附録中西医士臟腑図説」の部分で論じられ、そこには『医林改錯』の親見臟腑図と『全体新論』『婦嬰新説』からの人体解剖図が引用されている¹¹⁾。つまり「附録中西医士臟腑図説」の部分を加筆した時点が、中国伝統医学上で最初にホブソン西医書にある解剖図を登用した時となる。そうした『医林改錯』の親見臟腑図と西医解剖図を比較しながら、ホブソンのいう週身血脈管については、清任の營衛総管に対応するという前提のもとで、ホブソン側に評価を与えている¹²⁾。また「附録中西医士臟腑図説」の加筆以前に記した腎無形説については、『全体新論』の精囊と子宮に関する解剖図をみたことでこれを有形と認めている¹³⁾。このことより定昌は『全体新論』で外腎として論じられる生殖器を腎とし、内腎として論じられる腎臓は全く除外するという判断に至っており、最終的に「附録中西医士臟腑図」ではそうした内腎を表す腎臓図を不掲載としている。しかし定昌は、清任が親見臟腑で見出したものの中でも特に津管・総提・瓏管・出水道の説を高く評価し、一方のホブソン西医書にある脾・甜肉等の説明はこれに劣るとする等、それぞれの長短を見極めようとしており¹⁴⁾、解剖図を含めた西医の説に対し、基本的には慎重である。なお図 5-b(上)にある

「西医胃腑図」は、『全体新論』の「破辺胃経図」の引用とみられ、図5-b(下)の「勲臣脾臓図」は図1-b(左下)の清任親見臓腑図の脾図を表したものである。

2-3. 中国伝統医学の經典上に組み込まれる西医

『中西匯通医経精義』¹⁵は四川の唐宗海による著作で、初刊は一般に光緒18年(1892)とされる。『中西医解』¹⁶も同じ宗海による著作で、これも同年の刊行とされ、内容も『中西匯通医経精義』とほぼ同様である。しかし『中西匯通医経精義』にみられる解剖図と経絡図が付されない他、西医についての考証等の内容に加筆がみられる。現存の『中西匯通医経精義』は、光緒20年(1894)刊行のものを確認している。両書ともに広く出回っているが、中でも『中西医解』は後に刊行の『中外医書八種合刻』¹⁷を構成する他、『中西医判』と改名しての再刊本もあり¹⁸、その内容はどれも同一である。なお『中外医書八種合刻』の中には、先の『中西医粹』も収録される。

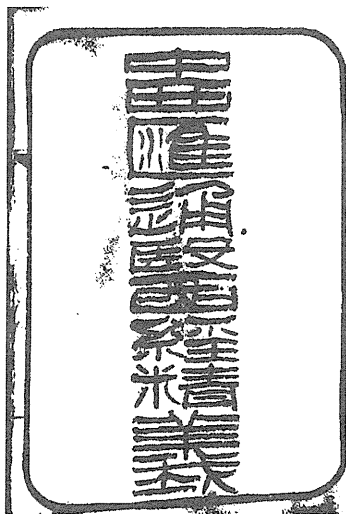


図6-a; 『中西匯通医経精義』扉



図6-b; 『中西匯通医経精義』「血脈図」

『中西医解』『中西匯通医経精義』共に『医林改錯』を引くが、中には否定的に扱ったものもみられ、清任親見臓腑図からの引用は1つのみである。他に1つだけ宗海による自作図がみられる以外に、『中西匯通医経精義』で示される解剖図は、『全体新論』をはじめ複数の中文による西医書等からの引用である。宗海は西医解剖図を高く評価してはいるが¹⁹、一方でそうした西医の内臓各図を伝統の五行を基礎とする序列に組み込んでいる。即ちそれまでの伝統医書にみられる形式の下で、旧臓腑図に代えて西医解剖図を挿入したのである。そして宗海はホブソンの『博物新編』等も参照し、西洋科学の体系が伝統の五行と本質的に通じるものとしている²⁰。

『中西医解』『中西匯通医経精義』共に『内経』よりの経文を提示した上で、これを注釈する

形式をとっており、その注釈でホブソンを初めとする西医の内容が取り上げられている。また宗海の代表作としては他に『血証論』『傷寒論浅註補正』『金匱要略浅註補正』『本草問答』があり、『中西匯通医経精義』はこれらと併せて『中西匯通医書五種』としても刊行されている²¹。つまり伝統の本草学の流れや、『傷寒論』『金匱要略』といった湯薬の経典の内容をも網羅したのが『中西匯通医書五種』であり、そうした中国伝統医学の考証軸の中に、宗海はより明確に西医の内容を組み込んだのである。伝統の理論形式上に西医解剖図を組み込んだことと併せて、こうした『中西匯通医書五種』の刊行は他の中西医匯通派と比べ、より大きな役割を果たしたことになる。そして「中西医匯通派」の呼称も宗海の著作名によるとされる所以でもある。

2-4. 中国伝統医学上で初の人体解剖観察

『華洋臟象約纂』²²は、南海の朱沛文による著作で、光緒19年(1893)に刊行されている。人体解剖図は、『全体新論』並びに『婦嬰新説』の二者からの引用が主で、それぞれ121、8の図の引用を数える。これらの図は、原書の図に非常に近い複製の版木等を用いており、ほとんどそれと区別がつかないほどである。これらを含めた引用の人体解剖図の総数は131にも上り、他の中西医匯通派のものとは比べても突出した点である。なお清任の親見臟腑図自体の引用はない。

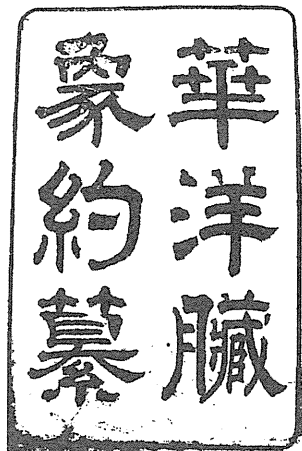


図 7-a; 『華洋臟象約纂』扉



図 7-b; 『華洋臟象約纂』「週身血脈管図」

沛文自身そうした西医書に目を通しただけでなく、その当時中国で開業する西医による病院に赴いて実際の人体解剖を目にしており²³、このことが多数の西医解剖図を引用したことの背景となっていよう。沛文も『医林改錯』の説を引くが、その全てが肯定ではない。清任の親見臟腑による幾つかの説については、憶測の域を脱しない部分があると批判し、西医によるものが真実に符合するとしている²⁴。そうした評価は、実際の解剖を自ら目にしてからこそである。

日本では、山脇東洋が初めて、西洋の人体解剖図を参照しながら刑屍観臓を行い、これを『藏志』に記録しているが、中国で初めてこのような西医解剖図と観臓という2つの条件を満たすのは、『華洋臟象約纂』が最も早いものとなろう。但し、沛文が西医による人体解剖を観察したという点では、西医の知識のない解屍者の手に委ねた観臓よりも質が高い。

2-5. 上海江南機器製造総局による初の中西医匯参書

『中西匯参銅人図説』²⁵は湘郷の劉鐘衡による著作で、光緒25年(1899)に上海江南機器製造総局より刊行されている。その当時、上海江南機器製造総局からは既に西医書を初めとする様々な西洋格致書が翻訳刊行されており、こうした中国伝統医学上の著作の出版は、他の中西医匯通派による書とは異なる意義がある。つまり表面的であるにせよ、中国伝統医学上の人物である鐘衡が、そうした西学推進の流れの中に身を置いたことは、中国伝統医学史上の初めての経験となる。そうしたことを背景に、数種の西医書を入手したことが述べられているが、その中でも特に『全体新論』の名だけが示されている²⁶。掲載される人体解剖図は、筆者等による手書きの模写とみられる。これらの図の形態や図中の語から、『全体新論』を引用したとみられるが、原図ほどの精妙さはなく、他の西医書からの引用である可能性も考えられよう。なお図8-bに上下に並ぶ2つの図は、それぞれ『全体新論』の「小腹内臓図」「破辺小腹図」に近い形態である。



図8-a; 『中西匯参銅人図説』扉



図8-b; 『中西匯参銅人図説』「男女膀胱合図」

(「男女膀胱合図」は「膀胱諸穴歌」に続いて付される)

『中西匯参銅人図説』の最大の特徴は、中国伝統の考えである臟腑の表裏関係にとらわれず、臟と臟、臟と腑ないしは腑と腑の解剖学的な直接の繋がりを重視していることにある²⁷。西洋の解剖図を元に冒頭に提示される「心肺合図」²⁸「脾胃合図」「肝膽合図」「腎与膀胱合図」「大小

腸合図」は、そうしたものを反映させようとしている。しかし「脾胃合図」は、むしろ伝統の脾胃の表裏関係によるものと考えるべきで、この関係については『全体新論』等をはじめ、当時の中文による西医書でも曖昧なことである。つまり脾胃の関係については『全体新論』等にみられる当時の胃周辺を示す解剖図を表面的に解釈したものには過ぎないのである。また鐘衡は、必ずしも清任の説の全てを支持しているわけではないが、これを重視している。特に「附録王清任先生臟腑辨」等の項目を設けた点の一つの特徴で、『医林改錯』で清任が指摘した古人による説の矛盾をまとめた上で、そうした清任の態度に一定の評価を与えている²⁹。

2-6. 日本経由による西洋医学流入の先駆け

『簡明中西匯参医学図説』³⁰は、浙江の王有忠による著作で、光緒32年(1906)に刊行されている。前項の『中西匯参銅人図説』の主旨を元に再編輯されており³¹、特に「心肺合説」「脾胃合説」「肝膽合説」「腎与膀胱合説」「大腸小腸合説」「臟腑合説」や「脈論」等の内容は、『中西匯参銅人図説』の対応する項目とほぼ同じものとなっている。しかし『中西匯参銅人図説』でみられた「附録王清任先生臟腑辨」や『医林改錯』からの引用等は除かれている。

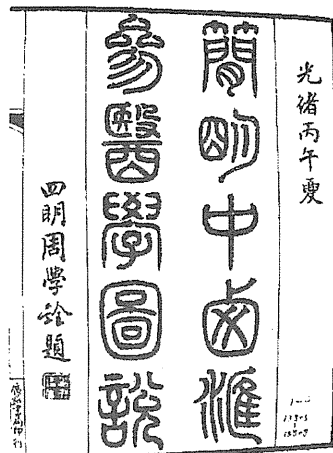


図 9-a; 『簡明中西匯参医学図説』扉

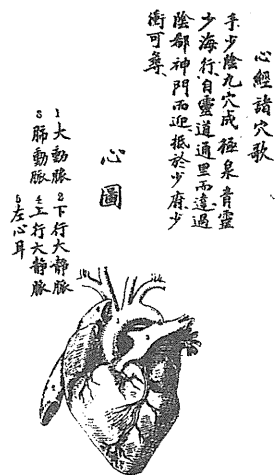


図 9-b; 『簡明中西匯参医学図説』「心図」

(「心図」は「心經諸穴歌」に続いて附される)

『簡明中西匯参医学図説』の最大の特徴は、そこに掲載される図そのものにあり、自序によると西洋の画法に精通した者を雇って描かせたものである³²。解剖図の多くは、その図の題目や図中の語彙・図の形態等から、『全体新論』を元にしたとみられるが、明らかにそれ以外からの引用図もある。解剖図と共に示される図中の語には本文と一致しないものもみられ、その中で

も特に「神経」「膀胱」「心室」「動静脈」等の語は、日本の西医解剖書等からのものとみられる(図9-b中には「大動脈」「下行静脈」「肺動脈」「上行静脈」等の語がみえる)。有忠自身にそうした本文と図中との語の異同に対する認識はあるが、具体的には説明していない³³。このことは、既に有忠の周辺に日本経由の西医書等が流入していたことを伺わせるものである。そして日本経由の西医や留学組のもたらす直接的な西医が、中国でも本格化するのはその直後となる。

3-1. 中西医匯通派における経典

山脇東洋が『藏志』で、『内経』の理論がみだりに主張されることに懐疑の態度を示したように³⁴、『医林改錯』にもそうした態度がみられ、更に明確に『内経』の理論を疑問視している³⁵。『藏志』と『医林改錯』に直接の接点はないが、両者の中には日中各々の近代解剖学への萌芽を担った書としての共通点が伺える。『医林改錯』は中西医匯通派の著作ではないが、後の中西医匯通派にとって重要な役割を果たしたことは、既に述べた通りである。『医談伝真』は、『医林改錯』のそうした「反『内経』」の態度を直接的に受け継いでいる。そして『内経』に代えて『周礼』や『神農本草経』を真の経典としている。しかし『医林改錯』が陰陽五行等の中華思想の核心理論から離脱しなかったように、『医談伝真』でも陰陽五行をもとに、医学理論を再編したに過ぎない。従来的な陰陽五行の運用を否定するものの、それは結局陰陽五行を基礎におく『内経』の理論と重なることとなっている。

『中西医粹』では特に、五行上で中央に配される脾胃を重視し、「附録中西医士臟腑図」でも、脾胃に関する図に重点をおいて掲載している。独自に展開する説の中でも、陰陽説と五行説とを結ぶ役割をこれにもたせている³⁶。そうした自説の展開は、『内経』の引用だけでなく、道家や易家の説を織り込んだものでもある。そうしたものは「易象陰陽臟腑全図説」の項目での、太極図を模した図による独自の身体論へと展開される。『中西医粹』で清任やホブソンを引くのは、ほとんどそうした定昌自らの説を裏付ける意図上のものである³⁷。十二経脈については、「附録中西医士臟腑図」で扱われる臟腑の各図とはほぼ無関係に陰陽の分類上で論じている。これは「易象陰陽臟腑全図説」の項目で、陰陽説を基礎として展開したことに基づくものである。

『中西匯通医経精義』では前述のように、『内経』の経文の考証上で、ホブソンをはじめとする西医の説をその他の伝統の説と併せて引いている³⁸。つまり中国伝統医学の経典上に西医の理論を組み込んだものである。『中西匯通医経精義』では、西医の展開する解剖学の体系が、中国伝統医学の基礎理論である陰陽五行の体系に包括されるべきものとみなされたのである。そうした陰陽五行の理論体系は、中国伝統医学の気化、即ち気の運行に関する理論に直結するものである。唐宗海はこうした点で、中国伝統医学が西医に勝るものとしている³⁹。中国伝統医学の

流れの中で歴代、『内経』を絶対的な経典としてきたことの核心はそうしたところにある。

『華洋臟象約纂』の各臓腑についての考証では、『全体新論』からの引用が多くみられるが、同時に様々な伝統の医書も引いている。伝統の臓腑の考えに加えて、甜肉・脳髓を臓腑と同格の項目として論じた点は、僅かに西医の説を反映させたものである。しかし結局、甜肉については伝統の脾の考えに属するものと結ぶに終わっている⁴⁰。臓腑の最後を結ぶ「脳髓体用説」の項目でも、『内経』が脳髓を奇恒之府に位置づけ、五臓六腑とは別体系で論じていること等を明示した上で⁴¹、西医の説を羅列するに留まっている。それらに、西医の主旨においての脳髓を中国伝統の説と融合させるといった沛文独自による積極的な展開はみられず、むしろ伝統の説を支持する趣が強い。なお沛文は、臓腑の筆頭に設けた「心臓体用説」の項目では⁴²、『内経』の「心者君主之官」の経文を提示し、更に『五行大義』より「人之動静性情莫不由心」を引く等、医書以外からの引用を加え、より明確に『内経』の説を支持している。この項目では、僅かに西医の「一切知覚運動其功皆属之腦」を引くのみで、経典を覆す意図は認め難い。結局、沛文は伝統の五行をこの書の各項目の骨格とするように、『内経』の経文を絶対的なものと位置づけており、このことは凡例でも明らかにしている⁴³。『華洋臟象約纂』の各項目の冒頭が「経云…」のように『内経』からの経文を明示することには、そうした意図が反映されているのである。

『中西匯参銅人図説』でも「経曰…」のように『内経』からの経文の引用が明示されている。鐘衡も西医解剖図に評価を与えてはいるものの、気化理論についてはやはり『内経』の経文を絶対視しており⁴⁴、そうした『内経』至上主義は『華洋臟象約纂』と同様である。

『簡明中西匯参医学図説』の主要部分では、『中西匯参銅人図説』の本文をそのまま掲載しているが、各項目冒頭の「経曰」の二文字を省略している。伝統の医家達にとっては、そうした『内経』の経文は、余りにも知られたものでもある。『簡明中西匯参医学図説』でも全文に渡って『内経』からの引用がみられるように、これを絶対的な経典としている⁴⁵。

3-2. 中西医匯通派と鍼灸理論上の経脈

中西医匯通派の諸医書の内、『医談伝真』と『華洋臟象約纂』は動静脈を経脈と解釈している。中でも『医談伝真』では『医林改錯』のいう衛-営管が西医の動-静脈であるとした上で、鍼灸理論の核心である十二経脈を否定し、即ち営-衛管の二経脈であると結論する⁴⁶。しかしこれは結局陰陽の二元論に帰結させたものであるに過ぎず、西医解剖図にみる動静脈を表面的に陰陽に割り当てたに過ぎない。『華洋臟象約纂』では経脈が西医の動静脈に相当すると解釈するが⁴⁷、経脈の概念自体は西医にないとしている⁴⁸。

『中西医粹』では、扱った西医の内容とは無関係に、伝統の経脈理論を述べるに留まってい

る。『中西匯通医経精義』では、西医が経脈や氣に関する理論で全く劣るものであると批判した上で⁴⁹、「十二経脈」の篇に従来通りの各経絡図を氣の運行順に示すに留まっている。また『全体新論』にみる「週身血脉管図」と同様の図の引用があるが、この図は静脈系を省略していることから、西医では静脈系の全容は未だ明らかではないものと解釈されている⁵⁰。つまり『全体新論』の本文で説明される静脈系の内容は『中西匯通医経精義』では全く反映されておらず、そうした西医解剖図の表面的な形態中心の解釈が為されたに過ぎないことが伺える。

『中西匯参銅人図説』では、西医解剖図を参照したことにより、伝統の臓腑の表裏関係にとらわれない、解剖学的な臓腑の繋がりを重視するに至ったことは前述の通りである。経脈についても、伝統の氣の運行順に捕らわれまいとする態度はみられるが、結局は三陰三陽の分類、即ち伝統の陰陽分類上で論じたに終わっている。『簡明中西匯参医学図説』では、臨床応用への便宜を考慮した経脈体系上で鍼灸処方が示されており、そうした意図の上で、西医による内臓の各解剖図も十二経脈の氣の運行順序に従って掲載され、そこにはまた同時に伝統の各経絡図も併記されている。西洋画法に通じた者に西医解剖図を描かせたこの書も、結局は従来通りの鍼灸理論体系上にそうした西医解剖図を併記したに過ぎない。

この様に中西匯通派と呼ばれる医家達の鍼灸理論に対する論点は、今日的な科学的解明とといったものとも全く異なるところにある。経脈を運行する氣に関する理論は『内経』を經典とする伝統医学の核心であり、常に絶対的なものであって、西医文明の立ち入る余地はないのである⁵¹。そして中西匯通派は西医解剖図に対して、中国歴代の経脈体系上で描かれてきた伝統の臓腑図を、視覚的により見栄えのするものに代えるという、表面的なところにしかその価値を見出していないのである⁵²。つまり西医解剖図は、中華文明固有の理論形式の中に組み込まれたに過ぎないのである。こうしたことを考慮すると、中国で一般的に中西両医学理論を融通させたという意味合いで用いられる中西匯通派という呼称そのものに問題のあることがわかる。少なくとも本稿で取り上げた中西匯通派の実際は、中国伝統医学を主体に、西医を表面的に参照したに過ぎず、「中西匯参派」の呼称とする等がより適当である。そうした中西匯参派が西医書を参照することで、中国伝統上の様々な身体論を省みる良いきっかけとなったということが最も重要で、中西匯参派の果たした歴史的役割もそこにある。しかしそうした中華文明にみる固有の身体論は、既に余りにも膨大なものとなっており、そうしたものを十分に検証する間もなく、続く近代国家建設の波の中に再び埋没することとなる。

4. おわりに

近代中国に起きた異文明医学の流入に際して中西匯参派の医家達が行ったことは、自らの

医学文明を支えてきた経典の再確認にしか過ぎなかった。中西医匯参派にとって、異文明の医学を理解するに必要なことは、自らの文明による医学の知識が全てなのである。そうした中西医匯参派による諸医書で浮き彫りになったことは、自らの医学に対してさえも充分習熟できていないということである。余りに歴史を重ね過ぎた自文明の知識に翻弄された形となったのである。そして自らの土台が定まらないところに、異文明による新たな医学の知識が加わったのである。こうした状況下で彼らが辛うじて行ったことは、伝統の医学理論の形式に、新たな知識を組み込むことであった。それは清任の示した「親見臟腑図」により、その価値の揺らいだ従来の臟腑図を、異文明のものに置換させたに過ぎないことである。文明の本質とは、そうしたところにあり、異文明によって化するということは、少なくともこの中西医匯参派にはあり得ないのである。「匯而不通」⁵³等の評がみられるこの学派の本質が、匯通とは全く異なるところに、その所在があったに過ぎないということは既に明白である。

付記；本稿執筆に当たり、目白大学の陳力衛先生に資料提供を含め、様々な助言を頂戴したことへの謝意をここに記したい。また中国国家留学基金管理委員会からは、高級進修生としての研究遂行上の支援を頂いた。ここに改めて感謝の意を述べたい。

【註】

¹ 厳密な中西医匯通派の定義はみられないものの、鄧鉄涛主編、1999『中医近代史』広東高等教育出版、32～61頁では、陳定泰以降から張錫純まで、即ち民国期に著作のある医家も含めている。本稿の指す中西医匯通派は、全てそこに挙げられる人物と重なる。なお鄧鉄涛等主編、2000『中国医学通史』（近代卷）人民衛生出版、115～126頁では陳定泰・羅定昌を中西医匯通思想のみられる人物として分けた上で、中西医匯通派の代表人物を唐宗海、朱沛文、惲鉄樵、張錫純等とするように、若干違いがある。

² 本稿では、王清任、道光10年(1830)『医林改錯』京都隆福寺胡同三槐堂書舗、道光10年初刻本(中国中医研究院図書館蔵)を参照し、図1-a～bはこれによる。

³ 拙稿2005「近代解剖学への萌芽における日中比較身体論」『或問』9号、81～84頁参照。

⁴ 陳定泰、道光24年(1844)『医談伝真』緑雲洞天、光緒元年(1875)初刻本(中国中医研究院図書館蔵)参照、図2-a～bはこれによる。自序は道光24年につくり「予往訪洋医。洋医出其図本相示。見其書厚約二寸。図有数百。自皮肉之毛。以至筋骨之髓。自臟腑之大。以及経絡之細。層層絵画精工異常。余飽玩十余遍」等と述べられている。

⁵ 合信、咸豊元年(1851)『全体新論』江蘇上海墨海書館蔵版、咸豊3年(1853)再刊本(筆者所有)参照、図3-a～bはこれによる。他に同「全体新論」、光緒～民国年刊『西医五種』石印本(南京中医薬大学図書館蔵)参照。

⁶ 合信、咸豊8年(1858)『婦嬰新説』上海仁濟医館、初刻本(南京中医薬大学図書館蔵)参照、図

4-a~b はこれによる。他に同「婦嬰新説」、光緒~民国年刊『西医五種』石印本(南京中医薬大学図書館蔵)参照。

⁷ 自序に「毎見中土医書。所載骨肉臟腑經絡多不知其体用。輒為掩卷歎惜」とある。

⁸ 「血脈運行論」に「中土医学分寸関尺。以属臟腑部位…無有專屬一經之理」とある。ここで寸関尺とはおおよそ今日の橈骨動脈上の脈動(いわゆる手首にみる脈動)を指し、寸関尺部位と特定の臟腑が対応するという中国伝統の脈診理論を否定している。

⁹ 羅定昌、光緒20年(1894)『中西医粹(臟腑図説症治要言合璧)』光緒20年刻本(成都中医薬大学図書館蔵)参照、図5-a~bはこれによる。他に正字山房蔵光緒27年(1901)刻本、上海孚華書局民国年刊石印本(共に南京中医薬大学図書館蔵)、および文匯堂光緒30年(1904)刻本(成都中医薬大学図書館蔵)参照。

¹⁰ 自叙は光緒8年(1882)に、臟腑図説序は光緒7年(1881)に、附録中西医士臟腑図説弁言は光緒13年(1887)に、中西医粹序は光緒20年(1894)にそれぞれつくる。臟腑図説症治要言合璧序に時は記されないが、『医案類録』弁言は光緒19年(1893)につくり「友人見余図説症治之刻…将医案附刻篇末」とあることから、光緒13~19年の間に『臟腑図説症治要言合璧』が全三巻として刊行されていたことが伺える。

¹¹ 「附録中西医士臟腑図説」で「読合信氏全体新論婦嬰新説。王勳臣医林改錯。並閱所繪臟腑諸図…摘録二家図説。与余所繪各図併而説之」と述べているように、そうした引用に際して定昌は実際に『医林改錯』『全体新論』『婦嬰新説』をみている。

¹² 「附録中西医士臟腑図説」に「心血管運行周身之血。合信氏詳之。王勳臣略之…營総管衛総管。左氣門右氣門。包括血管脈管廻血管。立論微約。不及西医之詳」とある。

¹³ 男女均有腎臟説の項目に「昌繪丹字図時未見合信氏繪男子膀胱図之精囊女子子宮図之精珠…以腎臟為有位無形今乃知其有形有物也…丙戌陽生日識」とある。丙戌とは光緒12年(1886)。

¹⁴ 「附録中西医士臟腑図説」に「按合信氏所論臟腑…於膈膜上之氣。府血府膈膜下之津管總管総提出水道。未能悟及王勳臣論之甚詳…彼比各有精義善。読者当棄其所短取其所長」とある。

¹⁵ 唐宗海、光緒18年(1892)『中西匯通医經精義』申江袖海山房光緒20年(1894)石印本(上海図書館蔵)参照、図6-a~bはこれによる。自序の内容は『中西医解』と同一で光緒18年につくる。

¹⁶ 唐宗海、光緒18年(1892)『中西医解』上海袖海山房光緒18年石印本(中国中医研究院図書館蔵)参照。

¹⁷ 『中外医書八種合刻』正字山房蔵光緒27年(1901)刻本(南京中医薬大学図書館蔵)参照。

¹⁸ 唐宗海、光緒18年(1892)『中西医判』上海三馬路千頃堂民国年石印本(筆者所有)参照。

¹⁹ 例言に「中国臟腑図…与人身臟腑真形多不能合。故各図皆照西医繪出。較旧図実為美善」とある。

²⁰ 五臟所生の篇に「西洋天学化学。雖与中国五行之説不同。而義実相通」とある。五臟所生の篇に「西医五種有博物新編図」等とみえるように、『中西匯通医經精義』の中では西洋の格物書については唯一『博物新編』の名があげられるのみである。

²¹ 『中西匯通医書五種』上海千頃堂書局光緒34年(1908)石印本(筆者所有)参照。なお『血証論』光緒10年(1884)、『傷寒論浅註補正』光緒20年(1894)、『金匱要略浅註補正』光緒19年(1894)、

『本草問答』光緒 19 年(1893)がそれぞれの成書年である。

²² 朱沛文、光緒 19 年(1893)『華洋臟象約纂』仏山初刻本(南京中医薬大学図書館蔵)参照、図 7-a ~b はこれによる。

²³ 自叙に「読華洋医書、並往洋医院、親驗真形臟腑」とある。

²⁴ 胃腑体用説の項目に「王氏發明出水道氣府等説較古、漸明而剖驗容有未真不無臆説、仍以洋義為確」とある。

²⁵ 劉鐘衡、光緒 25 年(1899)『中西匯参考銅人図説』上海江南機器製造総局初刻本(成都中医薬大学図書館蔵)参照、図 8-a~b はこれによる。自序は「劉鐘衡自序於上海江南機器製造総局」と結ぶ。

²⁶ 自序に「甲申來滬、又購得西書數種、有全体新論、詳繪骨肉臟腑半与前書脗合」とある。

²⁷ 例言に「是書臟腑合図、取其部位連属令人一目了然、不拘互相表裏之義也」とある。

²⁸ 実際にこの項目に図はないが、「合図見手太陰肺經」と注があるように、「手太陰肺經」に示される西医の肺と心臓とを併せた解剖図で代えている。

²⁹ 自序に「王清任先生医林改錯一書、以独見之智力、闢古人之非」とある。

³⁰ 王有忠、光緒 32 年(1906)『簡明中西匯参医学図説』広益書局、初版石印本(南京中医薬大学図書館蔵)参照、図 9-a~b はこれによる。

³¹ 例言に「近時劉鐘衡先生著有中西匯参銅人図説一書、議論簡当中外融通茲摺論説、歌括附入卷内」とある。

³² 自序に「近數年間精求西国格致之学於医学一道…其剖解之法及繪画之図悉皆毫髮不爽、現聘精於西画者繪成人体分合各図計五十條幅」とある。

³³ 例言に「列図像、惟辭句間有未加修削、蓋急就章也、閱者諒之」とある。

³⁴ 山脇東洋、宝暦 9 年(1759)『藏志』(京都大学富士川文庫蔵)参照。本文に「妄主張素難、執名失実」とある。一般に、素は『素問』、難は『難經』を指し、両者共に中国伝統医学の経典。

³⁵ 本文に「自靈素至今、二千年來、無人知其錯而改正者」とある等、『内經』への批判がみられる。なお本稿で『内經』とは、一般認識に従い『素問』『靈樞』の二者を含めたものである。

³⁶ 第二層戊己兩儀図説の項目に「一元未分、是為太極、兩儀初判、即成戊己、戊己者、天地之根、陰陽之本、生人之性命也、戊己在人身為脾胃…万物由土而生、戊己乃中央之土…為天地之門戸也」とある。

³⁷ 定昌は自説の展開で独自に丹字図を描き、更に「見西医合信氏所繪膀胱図上附有精囊一図、又繪有子宮一図…始悟腎之一臟男子、即精囊也女子即子宮也…丹字図方有証據」等と述べるように、ホブソン西医書の解剖図をその根拠としていることがわかる。

³⁸ 本文の各篇は一貫して『内經』の経文が先に提示され、これに続いて清任や西医からの引用等がなされ、更に宗海自身が註釈を施すといった形式である。

³⁹ 例言でも「所採西人臟腑図、非但據西人之説、実則証以内經、形迹絲毫不爽、以其図按求經義則氣化尤為著実」と述べている。

⁴⁰ 甜肉体用説の項目では、伝統医学の脾胃、並びに西洋医学の甜肉に関する説を引いた上で「然華義似較確」と結んでいる。

⁴¹ この項目の冒頭には「經云…腦者髓之海…名曰奇恒之府」と『内經』からの引用がある他、『本草綱目』にある「腦為元神之府」の説等も引いている。

⁴² 上巻の本文は順に、心臓体用説・肝臓体用説・脾臓体用説・肺臓体用説・腎臓体用説・甜肉体用説・心包絡腑体用説・膽腑体用説・胃腑体用説・小腸腑体用説・大腸腑体用説・膀胱腑体用説・三焦腑体用説・脳髓体用説の項目を設けている。伝統の五行による五臓本来の序列では肝・心・脾・肺・腎であるが、「心者君主之官」の義を取って、これを項目の筆頭としている。腑についての項目も心-心包絡・肝-膽・脾-胃・肺-大腸・腎-膀胱の対応から醸しだされる序列をほぼ採用している。小腸は胃と大腸との関係を重視してこの序列。三焦腑は、腑である心包絡の表裏関係にあるもので、即ち腑である心包絡に従属する腑であるから、より低い順位にある。

⁴³ 凡例に「所引諸家、及洋書之處、間有將經文為証」とある。

⁴⁴ 例言に「依西醫為體、証諸中醫…氣化功用則合參中外醫說、間引內經以衡是非…西人詳於形迹不免略於功用也」とある。

⁴⁵ 例言には「是編以陰陽為大綱以十二經為支目」とあり、即ち『内経』にある理論体系を基礎として編輯したことを述べている。

⁴⁶ 臟竅経絡之生篇で「十二經…考其真則…二經…二經者、營為一經、衛為一經」、「營衛」の項目で「營衛為藏氣血之管、即経絡也」と述べる他、「西洋心図」では具体的に動脈・静脈にあたるものをそれぞれ氣管・血管としている。清任は衛総管を氣管、營総管を血管とも呼称しており、定泰でも同様で、定泰のいう營衛二經は、清任のいうそれらを指す。

⁴⁷ 十二経脈奇経八脈十六大絡孫絡の項目に「按経脈者、大約如洋之血脈管、絡脈者、大約如洋之廻血管、孫絡者、大約如洋之微絲血管」とある。

⁴⁸ 血脈管廻血管微絲血管の項目に「所有十二経脈奇経八脈十六大絡三百六十五孫絡、皆洋書所不著」とある。

⁴⁹ 例言にも「西法近出詳形迹而略氣化、得粗遺精皆失也、因集靈素諸経採其要語、分篇詳註為救其失」とみえる。

⁵⁰ 全体総論の篇に「西醫有血脈図、然但図血出之道、未図血廻之管…夫彼所以不図廻血管者以一来一廻、紛而難辨也」とある。なお本文中の静脈系は、ホブソンや宗海の語では廻血管。なお『全体新論』の「週身血脉総管図」(図3-b参照)からの引用とみられるこの図は、名称のみを「血脉図」(図6-b参照)に改めて掲載している。

⁵¹ 『中西匯參銅人図説』およびこの書を引く『簡明中西匯參医学図説』共に例言に「陰陽生剋、氣血運行、有非西法剖驗所能明者、則以中醫論說為定、蓋取西人之詳於形迹、取中醫之詳於功化也」とある。その他の中西匯通派も、ほぼ同様の態度であることは既に述べた通りである。

⁵² 『華洋臟象約纂』でも凡例で特に「附刻臟腑官骸図式、皆選自洋醫、非棄華從洋、但以繪画工匠、洋人較勝耳」と述べており、西医解剖図に対する態度はより明確である。

⁵³ 浙江省中医薬研究院文献研究室、1993『中西匯通研究精華』上海中医学院出版社、152頁に「在特定歴史条件下産生的中西匯通思潮…其結果是“匯而不通”」とある。

【参考文献】

四部叢刊 1935『重廣補註黄帝内経素問』(明翻北宋本影印)上海商務印書館。

四部叢刊 1935『靈枢経』(明趙府居敬堂刊本影印)上海商務印書館。